

と見えるものの中に「協力」があり、あるいは「協力」と見えるものの中に「抵抗」があるという、多重性や複合性、さらには流動性を検討することが重要なのであって、こういったものを見落とすことなくきちんと評価しておかないと、植民地期朝鮮の社会を十分に把握することができないのではないかという懸念を抱いているのです。ですから、この問題は、これまで文学研究がリードしてくれたおかげで様々な事実がわかるようになったわけですが、一方で、文学者を中心とする従来の見方が、今後の対日協力研究に対して一種の制約になるのではないかという危惧があります。これを克服することが、我々歴史学を研究する者に課せられたもう一つの課業であると考えています。このような問題の所在が明らかになった、このことが今回の討議における二つ目の成果であると考えます。短いですが、以上が私のコメントです。

橋谷 弘

橋谷：東京経済大学の橋谷と申します。日本とアジアの経済関係史を勉強する中で、朝鮮に対する植民地支配の問題を経済史的な側面からみてきました。もう時間を大分過ぎておりますので簡単に二つほど、ご報告をお聞きして、あるいは私、途中から参加しましたのでペーパーで拝見した上でのコメントを申し上げたいと思います。

一つは、今回のシンポジウムのプログラムが送られてきた段階で、それを拝見して、まあ大袈裟に言えば非常に感慨深いものがありました。どういうことかと言いますと、恐らく十年前にこの「日本統治下の朝鮮」というテーマでシンポジウムを行ったであろうならば、当然入ってくるテーマ、これがむしろ全く見られなかったということです。十年前ならば、あるいはそれ以前ならば入っていたはずのテーマというのは、一つは、日本政治史の一環としての植民地支配政策史とか、あるいは日本経済史の一環としての日本企業の進出史などです。もう一つは非常に狭い意味での民族運動史です。こういったものが以前で

すこのテーマの下には必ず出てきた、むしろ、それが中心になっていたかのような状況があったわけです。それが今回のシンポジウムでは、全く見られないという点に非常に新鮮さを感じました。

それは1950年代、60年代、或いは70年代くらいまで、韓国の学会でも日本の学界でも主流であった枠組み、つまり一日目の鄭在貞先生の基調講演の中でもあげられていた「侵略と抵抗」という枠組み、この枠組みとは違った側面から植民地期を捉えていこうという意図の表れ、と考えられます。そしてもう一つ、これも鄭先生の講演の中で触れられた近年の「開発と収奪」という視点、これを乗り越えて、さらにもっと先の問題を扱っていこうという問題意識が、今回のシンポジウムから見られたことです。つまり、朝鮮史全体の固有の流れの中で、植民地期というものを位置付けていく、あるいは狭く言えば朝鮮近現代史の中に植民地期というものを位置付けていくという積極的な問題意識をみることができました。

以前ある研究者が、「植民地期には歴史が無かった」という話をされたと同ったことがあります。特に韓国ではそういった見方、つまり植民地期というのは本来の自分たちの歴史の流れとは違った時期、歴史がいわば断ち切られた時期だと捉えるような傾向が強かったと思います。しかし、今回の一連の報告というのは、近現代史の中に、否定的な意味も含めてこの植民地期というものを積極的に位置付けていこうとする問題意識が見られたという点に、非常に興味を惹かれました。

それから二番めのコメントとして、そういう風に植民地的な近代ということを考える場合に、今回のシンポジウムのもう一つの特徴は、世界史的な、あるいは比較史的な観点から植民地期を位置付けるという視点がみられたことです。これは、一日目のもう一本の基調講演である尹健次先生のご報告を始めとして、その他の個別報告の中でも前提として置かれていた、例えばポスト・モダン、ポスト・コロニアリズム、こういった欧米の植民地研究や歴史研究の中で提唱されてきた概念、これを朝鮮近代史を照らし出していく枠組みの中にも導入してみようという視点が見られたというのが新しい側面だろうと思います。

ただ、そこで一つコメントをしておきたいのは、ポスト・コロニアリズムという問題を考える時に、世界史的な議論ができる土台ができたという点ではプラスだと思いますが、同時に注意しなければいけないのは、欧米の支配した植民地と、朝鮮を始めとする日本の支配した植民地とでは、一つ決定的に違う側面が見られるということです。

その違う側面というのは、日本に支配された朝鮮は二重の意味での「近代化の制約」、制約というのは軋轢、あるいは葛藤が生じる原因ということですが、これを余儀なくされた。その二重の制約の一つは当然、植民地下で近代を迎えたということから来る軋轢、葛藤です。いわば近代というものが、今日の医学史のご報告の中でもあったように、外から移植され、強制された近代としてやってくるという側面です。これは、例えばインドであれ、あるいはアフリカであれ、欧米の植民地支配を受けた地域でも共通して見られる点です。同時にもう一つ日本の植民地の特徴としては、植民地的な近代を持ち込んだ日本にとっても、その西洋的な近代というのは外から持ち込まれたものだったということです。例えば、今日の医学史の報告を例にあげれば、そこで漢方医を抑圧しながら強制された医学というのは、日本医学ではなかったわけです。まあ直接には日本から入った医学であっても、その根源をたどれば西洋医学であったわけで、これは日本にとっても外来のもの、極論すれば近代になってから初めて持ち込まれたものという位置付けを持っているわけです。いわば支配者である日本も含めた東アジアにとっての近代、一言で言えば東洋対西洋というような意味での近代、これをもう一つの制約として朝鮮は背負わされざるを得なかったという問題があります。

つまり、植民地的な近代と、それから東アジア的な近代。これは先程南先生のコメントの中でもふれられた、なぜ東アジアで近代という言葉が嫌われるか、その問題とも係わってくるわけですが、こういう二つの意味での近代のくびき、制約というものを負わされた、こういう点が欧米の植民地とは違った朝鮮の植民地期の固有の問題ではないか、という風に考えられます。

そういったことをこれから先の研究の中で考えていく上で、非常に示唆を受ける具体的な研究がたくさん含まれたのが、今回のシンポジウムだったと思います。解放から半世紀の植民地研究、あるいは朝鮮史研究の蓄積の上で、ちょうど今の時期、これから21世紀の新たな問題意識の中で、植民地期を位置付けていくべき時期に、そういう新しい問題意識を象徴するような内容を持ったシンポジウムが開かれたことには、大きな意義があると思います。以上、簡単ですがコメントに代えさせていただきます。